第２５回山口県国際教育研究大会 報告

◆　日時：平成２９年８月１８日（金）

◆　場所：防長苑（山口市熊野町）

第１部　JICA ワークショップ

○ワークショップ「楽しく学べる国際教育のワークショップ」

講師：ＪＩＣＡ中国　山口デスク　木下　　愛氏

○青年海外協力隊　体験報告

講師：下関市立彦島中学校　教諭　沖田　裕一郎氏

１　ワークショップ「楽しく学べる国際教育のワークショップ」について

地球の食卓　フォトランゲージ(6 カ国)を行った。

（１）ねらい　比較的簡単に手に入れることができる写真（各国の「食事」「生活の様子」等）をもとに、その国の食文化や生活様式について話し合うことで、自他の違いを受け入れるとともに、グローバルな視点をもてるようにする。

（２）展　開

①　１０のグループをつくり、グループごとに１つの国の 3 枚の写真(1 週間の食材・生活の様子)を配る。

②　写真をもとに、どこの国なのかを話し合う。

③　グループごとに、自分たちが考えた国名とそう考えた理由を発表する。

④　講師から、写真の国名とその国の食文化や生活の様子について知らせる。

（３）実　際

フォトランゲージの 6 カ国は

マリ共和国(アフリカ)、モンゴル(アジア)、

ブータン(アジア)、オーストラリア(オセアニア)、

エクアドル(南米)、アイスランド(北米)。

① 各グループで話し合い、写真の国がどこなのか、また、そう判断した理由を発表し合った。写真から情報を読み取る過程で、いろいろな視点から観察することができた。

② 各グループの発表のあと、ＪＩＣＡ中国の木下さんが、「その国の文化」や「食生活」「自然」など、補足説明をされた。

③ 「食事」「生活の様子」の話し合いを通して、世界の人々の暮らしの多様性を実感することができた。このような活動を、教室でも行いたいという感想があった。

２　青年海外協力隊　体験報告

沖田教諭が青年海外協力隊としてタンザニアに派遣されたときの体験談をされた。

（１）タンザニアとはどんな国なのか

	タンザニア	日　　本
面　積(㎢)	94.5	37.8
人　　口	5,557 万人	12,600 万人
宗　　教	イスラム教（約 40%） キリスト教（約 40%）	無宗教 (51.8%) 仏　教 (34.9%)
ＧＮＩ(国民総所得)	900 ドル／１人	36980／１人
農場従事者割合	66%	5%

（２）現地での活動

タンザニアの中等学校で数学教師として働いた。タンザニアの学校は日本とちがい 1 クラス 50 人在籍し、1 日あたり 40 分授業で 10 コマまである。教科書は無償配布されるものの、教科書を売ってしまう子どもが多い。また、黒板に磁石は付かず、チョークは白のみ。教室に電気が通っていないので暗い。主な任務は現地の数学の先生と協力しながら、数学を教えることだった。さらに、教科書をもっていない生徒に課題を与えるために、学習プリントを作成した。加えて、近隣の小学校と共催で、数学の学習会や日頃の学習の成果をプレゼンテーションする機会を作った。

現地の学校と日本の学校の交流として、文通を行い、同世代の外国の人と夢や好きな食べ物やスポーツなどを紹介しあった。また、２週間に１度、「タンザニア通信」を発行してタンザニアの生活や文化について紹介した。

日本の教育環境とは大きく違う中で、子どもたちに数学を理解させ、学ぶことで生きる力を育んだ事の活動報告を聞き、会員一同感動した。

（３）青年海外協力隊の経験を学校現場で生かす取組

１学期、道徳の授業で「豊かな生活とは」という題で行った。豊かな生活を送るために必要なものにランキングをつけて説明させた。日本とタンザニアの子どもたちとの共通点は、家族や友達を一番に挙げたことである。このように共通点や相違点などをみつけて、新しい発見や、人と人との関わり合いが大切であることを改めて感じることのできるよい機会になった。

第２部　パネルディスカッション

「グローバル化に向け、これからの時代を生きる子どもたちにどんな力をつけていけばよいか」というテーマに基づき、3 人のパネラーが、海外で何年か生活した中での、戸惑いや驚き、不安、あるいは、自信や誇りについて、体験をもとに話し合った。

ロンドン現地校と日本人学校での学校生活を体験した澤田先生は、イギリス人の友達との関わりの中で感じたことや考えたことを、海外で子育てをした原田先生は、海外での子育てで驚いたことや学んだことを語った。そして、山口市でＡＬＴとして働くオーストラリア出身のデビット先生は、海外から見た日本の不思議やこれからの学校教育で大切にしたいことを語った。

各パネラーからは、この他に、自分の国の生活習慣、文化、精神性などが、外国で通用したこと、通用しなかったことについての紹介や、日本人パネラーには日本で事前に学んでおけば良かったこと、身に着けておけば良かったことなども語られ、その後に会場との活発な質疑応答がなされた。

日本人の良さについて、外国人と結婚し、長く海外で生活している女性は、「日本人は、ほんのちょっとしたヒントや示唆だけで、何をすべきかが理解できる」と話している。これは、自己主張が不得意であるが故に、日本人が身に着けることができた能力といってもよいと思う。今回のパネルディスカッションを通し、自分たちの能力を生かしつつ、自己主張する外国の人たちともいい関係を築いていくための資質や能力とは何かについてみんなで考えていくきっかけになったと考えている。

第３部　講演「新小学校学習指導要領における外国語教育のあり方と移行期間の取組に向けて」

講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課国際教育課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官　　直山木綿子氏

１　外国語教育に係る今後の予定について

平成２９年７月　研修ガイドブックデータ共有

８月　新教材の需要数調査実施

９月　児童冊子・指導書（印刷原稿５・６年）・学習指導案例（５・６年）のデータ共有

１２月　児童冊子・指導書（印刷原稿３・４年）・学習指導案例（３・４年）のデジタル教材（５・６年）のデータ共有

３０年１月　デジタル教材（３・４年）のデータ共有

２月　児童冊子・指導書・デジタル教材（３～６年）送付

４月　新学習指導要領移行措置及び先行実施による授業開始

２　移行期間における先行実施と移行措置

○　文部科学省では、移行期間に「最低１５単位時間」「総合的な学習の時間の一部を使ってもよい」というとらえ方をしている。これは「１５単位時間すればよい」「必ず総合の的な学習の時間を１５時間削減すること」という意味ではない。時間の取り方はあくまでも各校の裁量。ただし、同一中学校区ではそろえてほしい。

○　できるだけ３５単位時間、「先行実施」をしてほしいと願っている。ただし、国の方針でどういう指針が下りてくるのかはわからない。

○　プラスになる時間を現状の時間割のどこでとるかは学校裁量。標準時間数はあくまでも２８単位時間。クラブや委員会の時間を見直すことも一案。

３　研修ガイドブックについて

○　２９年度夏季休業中に各校で研修ができるよう、データでの配布をし、スピード化を図った。

※　紙媒体では配布されないため、各校で工夫して活用を。

※　新教材で出会う単語や、指導者が使うクラスルームイングリッシュも掲載。

（すぐにでも各校で具体的に研修を始めることができる内容になっている）

４　移行期における新教材について

○　国が新教材を作っている。

○　小学校の教師には、英語を教えることがどうしてもハードル。

⇒　教師用指導書に QR コードを付け、音声を支援。

○　配布されるもの

①　児童１人１冊のテキスト

②　担任１人１冊の指導書

③　デジタル教材（４種類の CD/DVD）

④　全時間の指導案（２１０時間）

⇒文部科学省 HP に掲載

○　全面実施後も３・４年生については配布を続ける。

○　小文字を先に導入する方が良いという意見が世の中にあるが、大文字からの導入には次のような意味がある。

＊子供たちにとって認識しやすい形である

＊子供たちが日常的に目にしている英語には大文字が多い

＊小文字と違って大文字は高さが同じ

＊左右対称である文字が多い　等

○　４年生のユニット２に「天気」がある。これは有識者会議で決まったこと。しかし、教室で「今日の天気は？」と児童に尋ねることはあまり必然性がない。そこで、天気を遊びに関連づける工夫をした。

○　５年生では文字に関する３つのことができるようにする。

①　４線に文字を書くことができるようにする。

※児童用の４線は、真ん中の幅を広く取り、視覚的にわかりやすくしている。

～ユニバーサルデザイン

②　文字を見て発音、文字を見て読むことができるようにする

③　文字を識別できるようにする

○　文字には音があることを学ばせる。

＊文字には名称がある…A（エー）

＊文字には音がある　…A（ア）　APPLE　⇒文字は単語の中に入ると、音で読む

※これは「発音とつづり」を学ばせるのとは違う⇒中学校

○　三人称を学ぶ

He likes と He studies　～語尾の「ｓ」の音が違う。～使い分けが難しい

⇒　“ｃａｎ”を使うことでこの問題を解消

○　6 年生では過去形を学ぶ

＊児童の会話の中では、過去のことを話題にすることが多い。

＊不規則動詞が出てくると児童が混乱する。　（例）eat －ate －eaten

⇒　明らかに音が異なる動詞を扱う　　（例）go－went

○　仮定法の導入

例：　If I were you,…　　※was ではなく、were　⇒　これは慣例的なもの

○　現在完了形の導入

I have＋過去分詞　※経験や継続、完了

※「やっと～した」「ちょうど～したところ」⇒　ずっと～してきたことが完了

○　感嘆文の導入

5　異文化と出会う大切さについて

○　母語の力がない子が増えている。～外国語が乗らない。

⇒　短い単語（pen, desk 等）はリピートできるが、少し長い単語やカタカナになっていない単語はリピートできない。

⇒　こうした子の多くは、家庭での親子の会話が単語レベルになっている。

○　違う文化にふれることで自分たちの文化がわかる。同じように、外国語に出会うことで、日本語の音の仕組みや文構造などの特徴に気付くことができる。

○　三重県や静岡県では、クラスの中に多くの外国籍児童が入り込んでいる。このような状況は、生産者年齢の人口減少により、海外からの労働力流入により、全国的に広がるようになる。つまり異文化をもった人たちと共に生活する場が増えることになる。

○　異文化との出会いは摩擦を生じさせる。結局はどこかで折り合いをつけることが大事になる。

○　外国語教育の先には世界平和がある。それを教材の中でも随所に示している。

（Hi,friends! Story Books の紹介を通して説明）

6　中学校英語について

○　語彙数が増える。現行では１２００語程度。これが１６００～１８００語程度に。

○　中学校では国語の授業時間数より英語の授業時間数の方が多い。

○　小学校で扱う英語は６００～７００語とされている。これを中学校英語が受けとめる必要がある。